「男、突っ走る！」

第67回

第一稿

作・壽倉　雅

登場人物

木内	雅也	（22）	『オフィスツリーイン』代表
船倉	篤志	（22）	元名古屋芸術専門学校学生
國村	英作	（51）	まちづくり会社社長
伊藤	理沙	（32）	若手起業家
大島	幸次	（51）	広告制作会社社長
橋崎	悟	（47）	ＷＥＢ会社社長
国枝	佐代子	（57）	市民映画プロデューサー
鈴川	良江	（68）	広告制作会社営業担当
田所	俊子	（61）	市民映画プロデューサー
黒田	武彦	（45）	市議会議員
辻沢	宏	（34）	保険営業マン
赤澤	辰夫	（43）	システムエンジニア

1　市役所・全景

2　市役所隣接のレストラン

雅也、黒田、辻沢、赤澤がランチをしながら話している。

雅也「（資料を見せながら）これが、現状の構成台本です。大まかなタイムテーブルとして、オープニングトークで五分、ゲストトークがおおよそ二十五分から三十分、後半の枠は十分前後が二つ、最後にエンディングトークで五分って感じです」

黒田「ありがとう。こういうのがあると助かるわ」

辻沢「さすが脚本家。ちゃんと尺も考えてあるんだね」

赤澤「確かに、ある程度時間を決めておいたほうが、全体的に楽だろうね。特にゲストトークなんてさ、人によってはどうしても会話が盛り上がっちゃって、ダラダラしちゃうときがあるんだよな」

雅也「こんな感じで大丈夫でしょうか？」
黒田「問題ないよ」
辻沢「後は、ゲストをどうするかですね」
黒田「あ、あの人はどう？　駅前のまちづくり会社の永田さん」
赤澤「永田さん、話長いもん」
辻沢「一回ゲストに来てくれた時、電波ジャックみたいに一時間マシンガントークだったじゃないですか？」
雅也「え、そんな人いるんですか？」
黒田「もう台本なんてガン無視。一時間ひたすら、自分のまちづくりへの思いを延々と語ってね」
赤澤「大人しいゲストのほうが良いよ。現に先月だって、木内君が来てくれたわけだしさ。台本に忠実になって、そこまで喋り慣れてない人のほうが良いだろうね」
黒田「うーん、誰かいないかな？」
赤澤「イベント告知とかどうかな。ほら、コンベンションセンターでやるイベント、今

度やるでしょ」

辻沢「それって、前にゲストで出ませんでしたっけ？」

赤澤「あんまり、同じ人とかイベント告知は被らないほうが良いよね。せっかくなら初登場の人が良いでしょ」

黒田「それは言えてるね」

辻沢「木内君、誰か心当たりいる？」

雅也「え……誰だろう……」

腕を抱えて考える一同。

N「地元で育ったと言いつつも、高校卒業後は専門学校で三年間ほぼ毎日名古屋に通い、全く地元との接点がなかっただけに、会議の中でゲスト出演者を誰にするのかという話し合いの中で、様々な地元の人の名前が候補としてあがると、自分はまだ地元で仕事をしていながら、全く地元のことを知らないのだと実感していました」

3　木内家・雅也の部屋（夜）

雅也がパソコンで資料作りをしている。

N「自分自身で地元を知るためには……そう考えたとき、やはり自分でフリーペーパーを立ち上げることが一番だと思うようになっていました」

4　『スタイル・タウン』・事務所（数日後）

編集会議をしている雅也、國村、伊藤、大島、橋崎、国枝、鈴川。

國村「じゃあ、今日の編集会議はこれで終わりたいと思います。ありがとうございました」

一同「ありがとうございました」

鈴川「じゃあ、私は早速営業行ってきます（と出ていく）」

橋崎「あ、ホームページ更新しなきゃ」

伊藤「私、社会福祉協議会に行ってきます（と出ていく）」

国枝「ねえ、木内君」

雅也「はい？」

国枝「来週の火曜日なんだけど、夜って空いてる？」
雅也「基本夜だったら、空いてますけど」
国枝「ラジオ出てみない？」
雅也「ラジオですか？」
国枝「地元のラジオ局で市民枠っていうのがあって、私そこで毎月第三月曜日の夜十一時から放送されてる番組でパーソナリティーやってるの」
雅也「あれ？　それって、市民枠のやつですよね」
国枝「あれ、知ってるの？」
雅也「実は、僕毎月第三火曜の二十二時からの番組にゲスト出演するんですよ、今月放送のやつで」
国枝「そっか、火曜日の番組は、木内君の地元の人たちでやってる番組だったわね」
雅也「そうなんです。しかも、十一月からはレギュラーにになりまして」
国枝「レギュラー？」

雅也「脚本を仕事にしてますでしょ。だから、番組の構成台本を作りながら、一緒にレギュラーやらないかって」

国枝「そっか。木内君、脚本やってるんだもんね。確かに、そういう人がいれば良いかもね」

雅也「国枝さんも、レギュラーやってたんですね」

国枝「私、勤務先の英会話教室で、子どもたちの発表会でやる英語劇の脚本も書いてたりしてるのよ。だから、私の番組は自分で簡単な構成台本作ってるんだけどね」

雅也「国枝さんの番組は、どんな内容なんですか？」

国枝「市民映画のメンバーと一緒に番組やってるから、基本的には映画トークなの。あ、木内君ならいろいろ映画詳しいんじゃないの？　脚本やってると」

雅也「まあ、ちょっとなら。それに、好きな映画もいくつかありますし」

国枝「良かった、じゃあ出てよ」
雅也「けど、火曜日の番組に出てる僕が月曜日にも出ちゃって大丈夫ですかね」
国枝「ああ、それもそうか。火曜日の番組は、地元民の一人として出演してるのよね？」
雅也「ええ。今月放送の回は、まだゲスト出演したときの回なので、地元のライターである木内雅也として」
国枝「私たちの番組は今月収録したら、放送は来月になるのよ。私の繋がりってことでゲストに来てもらうから、ここのライターってことで参加してもらえれば」
雅也「分かりました。そうします」
国枝「じゃあ、詳細はまた連絡するから。よろしくね」
雅也「はい」
国枝「（一同に）じゃあ、お先に失礼します（と出ていく）」
一同「お疲れさまでした」
大島、封筒を渡して、

大島「あ、木内君。すっかり遅くなっちゃったけど、これ渡しとくわ」
雅也「はい……」
と、訝しそうに封筒を開ける――交流センターのパンフレットが入っている。
雅也「ああ、交流センターのパンフレット……」
大島「また何かあったら、頼むよ。読みやすい原稿書くんだから、木内君は。じゃあ、俺もこれで。お疲れ様（と出ていく）」
雅也「國村さん、ちょっとご相談があるんですが、よろしいですか？」
國村「うん、良いけど」

5　商店街・中華料理屋

雅也と國村がランチをしながら話している。

國村「へえ、木内君の地元でフリーペーパーを」
雅也「はい。ありがたいことに、少しずつ地

元の人たちとも繋がるようになったんですけど、まだまだ全然地元のことを知れてないと思ったんです。自分自身が地元を知るために、一番良いのがフリーペーパーかなと思って」

と、鞄から資料を出して、國村に見せる。

雅也「企画書と言うか、簡単な概要書なんですけど」

國村「（資料を見ながら）『デイズ』って言うんだ」

雅也「英語で、日常とか日々っていう意味合いがあって、地元の日常を市民目線で発信できるようなフリーペーパーにしたいと思ってるんです。地元で活動してる団体やグループだったり、活躍してる人にフォーカスを当てて、自分の地元にこんな団体があるんだ、こんな人がいるんだっていうのを、市民の人に知ってもらいたいなと思って」

國村「へえ、良いコンセプトだね」

雅也「ありがとうございます」
國村「木内君が編集長になるの？」
雅也「まあ当分の間は、発行人と編集長とライターとデザインと営業と制作の全部を一人でやることになるかと思いますけど」
國村「一人でそんなに大丈夫？」
雅也「大丈夫ですよ。専門学校の頃に、四件も五件も同時に執筆タスク抱えてた頃と比べたら」
國村「そっか。専門学校でも、随分執筆してたんだっけ」
雅也「はい。僕の作品を全部持ってくれる同級生がいるんです。その子は、僕にとってのファン一号なんです」
國村「良いね、そういう子がいると、励みになるでしょ」
雅也「ええ。この間の創刊準備号も、お盆で一緒にご飯行ったときに渡したんです。まあ、僕と同い年なので、全然読者ターゲットじゃないんですけどね（と苦笑する）」

6

京都・街の全景（夜）

人の行き交いが激しい。

7

同・マンション・篤志の部屋（夜）

パソコンでオンラインゲームをしている篤志――手を止めて、あくびをしながら背中を伸ばす。

本棚の一角に『うっちーコーナー』と書かれており、『栄新名所図絵』や『17年目の秘密』などの雑誌やシナリオ本が入っており、一番右に『ぷれいす』創刊準備号が並んでいる。

篤志、『ぷれいす』を取り出すと、広げて中を見る――奥付ページに『ライター　木内雅也』の名前が書かれている。

8

名古屋駅・トイレ前（回想）

雅也と篤志が立っている。

篤志「みんなトイレ長げえな」
雅也「しょうがないよ。お盆でみんな飲み会やってるんでしょ。俺たちみたいに、何軒もはしごして飲んだら、トイレにも行きたくなるって」
篤志「それもそうか」
雅也「あ、そうだ。あつぽんに渡さなきゃいけないものがあったんだ」
と、鞄から封筒を出す。
篤志「まさか、うっちーの新作？」
雅也「うん。ちょうどこの間、シニア向けのフリーペーパーの原稿を書いてね」
篤志「ああ、商店街のお祭りで配ったんだっけ？　ＳＮＳで見たよ」
雅也「そっか。あつぽん、いつも『いいね』くれるもんね」
篤志「仕事はどう？　順調そう？」
雅也「まだまだだけどね。もうすぐで半年かって思うと、早いわ」
篤志「もっとたくさん作品を世に出してくれ

よ。京都の俺のマンションにも、ちゃんと『うっちーコーナー』作ってあるんだから。早く棚全部が埋まるようにしてもらわないとさ」

雅也「そんなのいつになるか。まあ、もっと分厚い本作ったり、原稿を書かせてもらえるようなものがあったら、すぐに埋まるけどね」

篤志「俺は、うっちーのファン一号なんだからな」

雅也「分かってる。大事な大事な、ファン一号だからね、あつぽんは」

篤志「応援してるから、もっと良い作品作ってくれよ」

雅也「うん。このフリーペーパーは、創刊準備号だけど、今年の秋には創刊号として第一号が出るから、楽しみにしてて」

篤志「それもうっちーが書くのか？」

雅也「俺しかライターいないんだもん。創刊準備号から、巻頭特集の原稿書かせてもら

えてるんだもん、それだけでもありがたいことなんだから」

篤志「栄の歴史雑誌の編集長やってたから、こういうのはお手のもんじゃないのか？」

雅也「学校で作る雑誌とは全然勝手が違うもん。まあ、その中でいろいろ勉強してるの」

篤志「次出来たら、またちゃんと渡してくれよ」

雅也「当たり前じゃん」

9　京都・マンション・篤志の部屋（回想戻り）

『ぷれいす』を読んでいる篤志――本を閉じると、そのまま棚に戻す。

10　ラジオ局・表（夜）

雅也が待っている。

N「それから数日後のこと。僕は、国枝さんのラジオ番組に出演するために、再び地元のラジオ局を訪れました」

と、そこへ二台の車がやってきて、それぞれ国枝と田所が降りてくる。

雅也「こんばんは」

国枝「今日はありがとね」

田所「よろしくお願いします」

雅也「ああ、えっと田所さんでしたね。確か、異業種交流会で一度」

田所「あら、覚えててくださってたんですね」

雅也「もちろんです」

国枝「じゃあ、行きましょうか」

雅也「はい」

11　同・収録室

雅也、国枝、田所がイヤホンをつけて、それぞれマイクの前に座っている。

国枝「それでは、本日のゲストをご紹介したいと思います。今日は、シニア向けフリーペーパー『ぷれいす』の専属ライター、木内雅也さんにお越しいただきました。こんばんは」

雅也「こんばんは、木内です。よろしくお願いします」
田所「よろしくお願いします。シニア向けフリーペーパーって言ってるのに、全然シニアじゃない」
国枝「木内さんは、今おいくつですか？」
雅也「来月で二十二歳になります」
田所「二十二……。私の娘よりも若い」
国枝「同じく。私の娘より若い」
田所「あれだよね、ある意味では私たちは木内君のお母さんと変わらないぐらいってことになるわね」
雅也「そういうことになりますね。こういう時、どう言って良いか分からないですけど」
N「こちらのラジオ番組でも、楽しい収録となりました。まさか十月と十一月と、二ヶ月に渡って地元のラジオ番組にゲスト出演するとは思ってもみないことでしたが、地元で活動する僕にとっては、良い宣伝にもなっていました」

12　木内家・雅也の部屋

雅也がスマホでＳＮＳの投稿をしている――雅也、国枝、田所と映った記念写真を添えている。

Ｎ「ラジオ番組への出演のことは、ＳＮＳを通じて大々的に宣伝をし始めました。このラジオは、専用アプリをダウンロードしたら、地方でも聴けるのですが、どうやらそのＳＮＳの投稿で書かれていたアプリの一文を見て、ラジオを聴いてくれた子がいたようで……」

13　京都・マンション・篤志の部屋（夜）

篤志が慌てて帰宅する。

篤志「早くしなきゃ……」

と、鞄からスマホを取り出すと、アプリを起動する――ラジオ番組が流れており、篤志が聴いている。

黒田の声「さあ、というわけで今日のゲスト

をご紹介しましょう。それでは、つーじー、紹介お願いします」

辻沢の声「はい。本日のゲストは、地元でライター業をしている『オフィスツリーイン』代表の木内雅也さんです」

雅也の声「よろしくお願いします」

拍手の音。

黒田の声「いや、今日のゲストは若いね。ちなみに木内さん、今おいくつですか？」

雅也の声「今年二十二歳になります。まだ二十一歳です」

黒田の声「聞いた？　二十二だって。二十二の時なんて、俺何やってたかな、こんなしっかりしてなかったと思う」

14　木内家・雅也の部屋（夜）

風呂上がりの雅也が入ってくる――ベッドで横になりかけたとき、スマホの通知が来る。

雅也、スマホを開くと、篤志からのＬ

ＩＮＥが来ている。
篤志の声「ラジオ聴いたよ」
雅也、微笑んで返信をする。
雅也の声「ありがとう」
雅也「（呟くように）あつぽん、聴いてくれてたんだ……」

15　喫茶店（数日後）

雅也と国枝が、コーヒーを飲みながら話している。
国枝「そう。地域のためのフリーペーパーを」
雅也「國村さんにも、先日ご相談したんです。まあ、ここで得た知識をアウトプットできますし、良い勉強にも経験にもなると思って」
国枝「ねえ、そこでさコラムを書ける枠作ってくれないかな。私、映画のコラム書いてみたいんだけど」
雅也「ぜひ。いかんせん、発行人も編集長もライターもデザインも営業も制作もしばら

くは一人でやらなきゃいけないでしょ。そうやって何か枠を埋めてくれる方がいると、正直負担が減って助かります」

国枝「ありがとう。また文字数とか分かったら教えてね」

雅也「お願いします。いや、良かった。国枝さんにご相談できて」

国枝「任せといてよ。だてに、市民映画プロデューサーやってないわ。私で良ければ、何でも相談して」

雅也「心強いです」

微笑み合う雅也と国枝。

つづく